

第36回

中学生からのメッセージ

令和5年度

日時 令和5年11月11日(土) 13時00分~15時40分
会場 とかちプラザ レインボーホール
主催 帯広市教育委員会 帯広市教育研究会
後援 帯広市中学校長会 帯広市小中学校文化連盟
帯広市青少年育成者連絡協議会 帯広市PTA連合会
北海道退職校長会帯広会



目 次

【巻頭言】

- 集録の発刊によせて
帯広市教育委員会 学校教育部長 服部 哲也 …… 1

【中学生からのメッセージ】

- 最優秀賞
見方を変えれば …………… 帯広第八中 (2年) 浅野 花之子 …… 2
- 優秀賞
優しい言葉よ 海になれ …… 帯広第一中 (3年) 村井 楓 …… 3
人間だから …………… 西陵中 (3年) 築保 乃愛 …… 4
戦争のない平和な世界で
在り続けるために …………… 南町中 (3年) 石田 明莉 …… 5
未来への1ピース …………… 帯広第二中 (3年) 石原 咲和 …… 6
- 優良賞
「わがまま」 …………… 翔陽中 (2年) 関下 芽依 …… 7
共存するためには …………… 八千代中 (1年) 合歓垣 依吹 …… 8
ケガは自分を見直す機会 …… 川西中 (3年) 今野 陽翔 …… 10
心を動かす言葉 …………… 大空学園 (7年) 猪股 葵 …… 11
相手を理解しようとする気持ち …… 帯広第七中 (3年) 堀田 安里 …… 12
当たり前の価値観 …………… 緑園中 (3年) 岡本 ルミナ …… 13
努力と才能 …………… 帯広第四中 (2年) 樋野 愛菜 …… 14
「忙しい」の向こう側 …………… 帯広第五中 (3年) 岡田 心香 …… 15
言葉の持つ影響力 …………… 清川中 (2年) 中村 華音 …… 16

【講評】

- 審査員長講評
帯広市青少年育成者連絡協議会 会 長 細岡 和幸 …… 17
- 審査員名簿 …………… 18

集録の発刊によせて

帯広市教育委員会

学校教育部長 服部 哲也

中学生からのメッセージは、昭和63年に第1回目が開催され今年で36回目を迎えました。新型コロナウイルスやインフルエンザ等の感染症が流行しておりましたが、各校の代表生徒14名全員が発表の舞台に立てたこと、そして集録を皆様にご覧いただけることを大変嬉しく思います。

この大会は、中学生が日常の中で考えていることや感動などを自分の言葉でまとめ、広く発表することにより、社会との関わりについてより深く考え、社会参画への意欲を高める契機としていただくことを目的に開催しています。

今回も様々なテーマの発表がありました。平和な世界のために考える姿、将来の夢に向かっていく姿、等身大の自分を表現する姿など、発表を通して一人一人の成長を垣間見ることができました。

これからの未来を切り拓いていく中学生には、この大会を通じて、自らの考えを正しく伝える力や他者の考えを理解する心を育んでほしいと願っています。

本大会の開催にあたり、ご後援やご協力を賜りました多くの皆様に心より感謝申し上げ、発刊に当たってのご挨拶とさせていただきます。



私は、陸上競技部に所属している。タイムが伸び悩み、周りの選手と比べて勝手に悲観的になっている自分がいた。どうしても、自分の欠点ばかりに目が向いてしまう。

私の母は特別支援学校の教員で、二年前から聾学校で勤務をしている。一生懸命に手話の勉強をする母の姿を見て、聾学校に通う生徒の様子が気になった。私は「耳が聞こえない＝かわいそう」と思っていた。なぜなら、耳の聞こえない世界では家族や友達の声を取り取ることができないし、音楽やTVだって思うように楽しめないと思っていたからだ。ところが、実際に耳の聞こえない人たちと関わる母の話を聞いていくうちに、私は自分の考え方は「私の決めつけ」ではないかと思うようになった。そこで、私自身が手話を覚えて直接交流をもつことはできないかと考えた。

そこから私は手話の勉強を始めた。中学校の勉強や陸上の練習など日々の生活に加えて、新しいことをゼロから始めることは難しく、なかなか手話を覚えられずにいた。それでも続けていくことで少しずつ覚えていくことができ、それを試す機会が今年になってやってきたのだ。

去年はコロナの影響がまだあって、陸上の大会でも他校の生徒との交流はできないなど、多くの制限があった。でも今年の大会では、そんな制限がだいぶ緩和されたことによって、私自身も周りの人たちもお互いにコミュニケーションをとれるようになっていた。そこで私は、大会に参加していた聾学校の生徒と会話をしてみたのだ。私の手話はまだ一人前ではないので、聾学校の引率の先生の通訳が必要だったが、直接会話できることがとてもうれしかった。話してみると、私は『やっぱり通訳なしで話したい』という欲が出てきて、本格的に手話の勉強をするために、手話サークルに入る決断をした。

サークルでは、聾学校の生徒だけでなく、「おびひろ市民学」の手話講座でも講師をしてくださった先生や一般の聾者の方もいて、多くの人

と関わることができた。その中での出会いこそが、私の考え方を考えることになる。

それは、補聴器をつけていても、生活に必要な音を聞きとることが難しい聾の二人との出会いである。

二人は会うたびに手話でたくさんのお話をしてくれた。私がところどころ手話を読み取れないときには、ゆっくりと何度も説明してくれた。どんなことも全力で楽しんでいる様子、周りを明るくできる笑顔、優しさで溢れた気遣い。二人に出会うことができ本当に良かったと思った。ある日、二人はこう言った。“手話っていいよね。だって、口いっぱいにごちそうをほおばっていても、物音を立てたらいけない静かな場所でも、手話を使えば自由に話をする事ができるから。”

二人との出会いは私の考え方を180度変えた。私が思っていた考えは見方を変えることができる。耳が聞こえないことに限らず、誰にだって欠点ととらえるものはある。もちろん私にだってある。でも、周りを気にするより、自分らしくいることが大切だ。二人は私に、「見方を変えることで見えてくる良さやありのままの自分」を教えてくれた。

中学一年生、シーズン最後の大会。やっと出た自己ベストも周りよりは速くなかった。やっぱり周りより足を速くすることは難しい。けれど私は、陸上部に入ったことを後悔していない。なぜなら、最高の仲間や頼もしい先輩と出会うことができたからだ。

私は現在中学二年生。陸上部には後輩が入部してきて、私は先輩になった。私は後輩に対して、少し誇らしげに次のように言う。「私は速く走るの苦手なの。でも、中長距離をペースを保って走るの得意だから、任せて！」と。だって、ありのままの自分でいようと思えたから。



「どういたしまして」。「ありがとう」の返事としてよく使われるこの言葉、最近はずっかり耳にすることが無くなりました。皆さんはどうでしょうか。「ありがとう」という感謝の言葉、「どういたしまして」という感謝に対する返事の言葉を口にしていますか。今回は、優しい気持ちになれるこの二つの言葉について話していきます。

あれは暑い夏の日の昼のことです。私は部活動の一環として動物園の写生絵画コンクールに作品を応募するために帯広動物園に向かいました。動物園に着き、ちびっこファームでエゾリスの絵を描いていると、三才くらいの女の子が近づいてきて「上手だね」と言ってくれました。見ず知らずの私にわざわざ話しかけてくれたのが嬉しかったので「ありがとう」という言葉が口からこぼれ出てしまいました。私は「ありがとう」と返した時に、ここで会話が終わるだろうと思いました。その時です、「どういたしまして」という言葉が私の耳に飛びこんできました。この時私はとても驚きました。ここしばらく「どういたしまして」という言葉を使ってこなかったし、聞いてもいなかったからです。この時は、驚きはしたもの（そういえば、昔は良くこの言葉を使ったな）と他人事のように軽くながしてしまいました。

動物園での出来事があった後、道徳の授業で「言葉おしみ」という題材の話を勉強しました。そこには、「手近にいい言葉がありながら、私たちがそれを使わずにいるのが残念です。」と書かれていました。この言葉に私は強く共感しました。例えば学校でプリントを回す時、「お願いします」「ありがとうございます」までは、ほとんどの生徒が言っています。それでは「どういたしまして」はどうでしょうか。あまり使われていませんよね。少なくとも、私が中学校生活を送ってきた中では聞いたことがありませんでした。

道徳の授業をうけ、「どういたしまして」とい

う言葉に興味を持った私は、今までの経験のなかでこの言葉を口おしみせずに言っている人がいたのだろうかと考えました。そして、職場体験の保育園での出来事を思い出しました。お昼に幼児と一緒に給食を配膳していた時のことです。机の上に給食が置かれるたびに幼児の間で「ありがとう」や「どういたしまして」という言葉が飛びかっていたのです。この光景を見て、私たちは、こんなに小さな頃から、優しい気持ちになれる言葉を知っているのに、このような言葉たちは、徐々に徐々に頭のすみっこにおいやられ、いつのまにか自分の中から消えてしまうんだと考えました。

私達は、大人になるにつれて「どういたしまして」と素直に口にすることが少なくなっていくと思います。ですが、考えてみてください、「ありがとう」や「どういたしまして」という、温かい言葉で溢れている世界は美しいとは思いませんか。反対に「ありがとう」や「どういたしまして」というささやかな優しい言葉のない世界、人と人とが感謝を伝え合わずにただ黙っている世界は悲しいとは思いませんか。今を生きる多くの若者は、このようなささやかな優しい言葉をあまり口に出すことがありません。「黙っていても相手に気持ちが伝わるはずだ。」そう思いこんでいるのです。ですが、黙っていても、よっぽど仲の良い相手でも、家族ですらも相手が何を考えているかなんて分かる人はいません。「ありがとう」の言葉を口にされた時に、感謝に対する返事をしましょう。「ありがとう」で終わってしまったのは、せっかく相手が伝えてくれた優しい言葉を無視することになってしまいます。優しい言葉には優しい言葉で返しましょう。そうすれば、自分の周りが優しい言葉で溢れ、やがて海のように広がっていきます。

「どういたしまして」と口にしましょう。この言葉には、言ったほうも言われたほうも幸せに、温かい気持ちに出来る不思議な力があるのですから。



私の兄は、生まれつき障害をもっています。その兄がこの間入院しました。入院する際には誰かが常に面倒を見なければいけないので、母が付き添うことになりました。病院では直接面会ができず家族にも会えない期間は私にとってとても長く感じました。

「ただいま。」帰宅した私がそう呼びかけても、いつもと違い電気がついていない家の中からは人の声すら聞こえません。家の雰囲気寂しさを感、人との関わりは必要不可欠なものだと実感しました。そばにいてだけで、同じ空間にいてだけでわかり合えるのです。そんな人間の持つ能力を大切にしないでほしいです。しかし技術の進化によって人との直接的な関わりが減っている今、対面で話をする事の大切さを重要視する人は少なくなっているのではないのでしょうか。

私はバドミントン部で副部長を務めていました。練習は試合のルールが違うシングルスとダブルスに分けておこなわれています。ダブルスの練習を引っ張る部長や副部長がいなかったため私がそのグループをまとめることになりました。人数も多く、私一人でまとめることはとても大変でした。加えて練習メニューも私が考えなければいけなかったのも、忙しさのあまり何度も投げ出したくなりました。しかしそんなとき同級生から「いつも練習メニュー考えてくれてありがとう。めっちゃ助かってる！」と伝えてもらったのです。私はその時胸が熱くなりました。これまでは部活が嫌になるほど落ち込み悩んでいたのに、直接気持ちを伝えてもらった瞬間、その気持ちは一気に消えて、これまでの頑張りが認められた気がしました。私の気持ちを 180° 変えてくれるだけでなく、前向きになれたのは仲間に直接気持ちを伝えてもらったおかげです。対面での会話は人の心を動かすことができるのです。

とは言え、世の中は急激に便利さを求めた技術

の進化で、私の周りを埋め尽くしています。私が衝撃を受けたのは、レストランで注文した料理をロボットが運んでいたことです。それにより私達の生活とロボットがとても身近なものに感じられました。そのレストランではタブレットを使って料理を注文し、ロボットを使って料理を提供します。確かに、経営者側からすると少人数で接客し効率よく料理を提供できるため技術の進化はとても良いものだと思います。しかし、「ご注文の料理をお持ちしました。」そうしてくれるのは感情を持っていないロボットで、私達もまたロボットに向かってお礼を言うこともありません。このように、技術の進化は人との直接的な関わりを奪ってしまうことがあります。人との関わりが少なくなること、会話や挨拶からの人のあたたかさが感じられなくなってしまい、コミュニケーション能力の低下も気がかりです。そう考えると、進化した技術によって私達の生活が必ずしも良くなるとは言えないのではないのでしょうか。

確かに、最近では進化した技術が至る所で使われていて私達の生活を便利なものにしてきています。その中には短時間で同じものをたくさん作れたり、車の自動運転ができたり、人間にはできないこともあります。しかしレストランの接客ロボットのように、対面での会話の機会が少なくなっていることも事実です。技術の進化も私達の生活を良くするために必要ですが、私達が本当に大切に守っていくべきことは他にありません。人との関わり、特に対面での会話は昔からあり、長い間培われてきたものです。技術が発展して、人との直接的な関わりが減っている今だからこそ、これまで以上に私達が人との関わり、そして対話を重要視すべきです。人間だから、人との対話から生まれるあたたかさをこれからも大切にしていきたいです。



1945年。たった一つの原子爆弾によって、びっしりと立ち並ぶ家々、商店街のにぎわい、子どもたちの笑顔、何気ない当たり前の日常、何もかもが一瞬にして壊された広島。その中に位置する原爆ドームを私は小学4年生の時、訪れたことがあります。現地で初めて目にした時、原爆ドーム自体がまるで何かを訴えかけているような、何かを語りかけているかのような、そんな不思議な感覚に襲われたのを今でもはっきりと覚えています。

原爆ドーム付近にある広島平和記念資料館に「魂の叫び」と呼ばれるコーナーがありました。命を失った人々の無念と遺族の方々の深い悲しみといった、心の底からの叫びが、遺品とそれを巡るエピソードからおのずと伝わってくると同時に、原爆によって亡くなったのは必ずしも大人だけでなく、私たちより小さな子供たちも一瞬にして幼き命を失ったということを知り、言葉を失いました。一発の原子爆弾が無差別に多くの命を奪い、生き残った人々の人生も何もかも一瞬で奪ってしまう絶大な恐ろしさを目の当たりにしました。

戦争は絶対にあってはなりません。自分達と同じ苦しみや悲しみを経験させてはならないという被爆者の思いを胸に留め、永久に争いのない平和な世界をこの先も引き継ぐ『意志』と『行動』が非常に重要になってきます。

「午前8時15分は毎朝やってくる 1945年8月6日の朝 一瞬にして死んだ25万のすべて いま在る あなたの如く 私の如く やすらかに油断していた。」これはある日の国語の授業で原爆をテーマに石垣りんさんによって書かれた「挨拶」という詩の最後の部分です。未だに数百個の原爆が存在している中であの悲劇がまたやってくる可能性だってあります。それなのに私たちは『明日は必ずやってくる』と信じ込み、危機を認識していきま

せん。この詩は私達自身が原爆という悲惨な過去を他人事だと、自分には関係ないと物語り、原爆によってたくさんの命や日常が奪われたという事実を忘れてはいけないと再認識させてくれているのです。

本当に私達はそれでいいのでしょうか。学校に行く。授業を受ける。ご飯を食べる。友達と笑い合う日々。家族と過ごす温かい時間。そんな幸せな当たり前の日常がいつ途絶えるか。思いがけない事件や危険がいつ、どこで起きるか、私たちには分かりません。それでも午前8時15分は毎朝やってきます。だからこそ、毎日の何気ない一つ一つの小さな幸せをぎゅっと噛みしめながら、自分自身を常に支えて温かく見守ってくれている多くの人への感謝の心を忘れず、笑顔で日々を迎えることが何より大切なのです。

ロシアとウクライナのように、未だに続いている戦争を無くすには、今戦争をしている人々や、平気で人の命を奪おうとする人々の心を変えるしかありません。人を犠牲にせず、互いの強みを尊重することで、安全に快く暮らせる環境を作り上げることができるのです。そして、一人一人が温かい思いやりの心を持ち、それぞれの個性を大事にし、生かすことで、お互いの立場を考えあい、様々な人が生きやすい、より良い平和な世界へと変わっていきけるはずだと、私は考えます。今私にできること。それは、家族や友達など、誰しもの身近で起こる些細な小さな争いを、少しでも減らすことです。そのために、お互いに意見を話し合って聞き合い、一人一人が抱えている悩みや苦しみを少しずつ和らげ、お互いのことを分かり合えるかけがえのない関係を私は築いていきます。



みなさんはAIについてどのように考えますか。現在、AIは私たちの生活に深く関わっています。医療機関はもちろん、エアコンやお掃除ロボットなどのたくさんの身近なものに使われています。最近では絵を描くもの、俳句をつくるものもあり、今話題の「チャットGPT」などは、話題を入力するだけでこのような作文も書いてしまうそうです。このAIを批判する人はたくさんいますが、それはAIの存在が悪いのではなく、私たちの使い方が悪いのではないのでしょうか。AIの特徴をいかし、私たちが適切な場面で使うことができれば、もっとより良い生活を送ることにつながります。私がそう思えるようになったのはある幼なじみのおかげでした。

私が通っていた幼稚園には障がいをもった子がいました。当時の私は何の障がいかはわかりませんでしたが「すごく変わった子だな」と思ってしまうほどでした。そんな私も、かなり変わっていたので、よく私たち2人には同じ先生が側についてくれました。そんなこともあり、私たちは自然と2人で遊ぶようになりました。ゲームで私が勝ったら、怒って泣いてしまったり、折り紙で遊ぼうとしていたのに、急に外へ出ていってしまうなど、大変なこともあったけれど、私たちは仲よくしていました。しかし、ある時その子を遊びに誘うのは、私以外にいないということに気づきました。「なぜだろう」と私は思い友達に聞いてみました。すると友達は、「だって、あの子ちょっと気持ち悪いじゃん。すぐ大きい声だすし、逆にどうしてあの子と遊ぶの？」今でもあの友達の言っていた言葉は鮮明に覚えています。確かに「障がい者」であって「普通」と違う部分はたくさんあります。しかし彼も友達も私も同じ幼稚園児です。「みんなで仲よくできればいいのに・・・」私はこの時から、障がいをもっている子も、もっていない子も、自然と一緒に遊べるようになればいいなと思うようになりました。

そして、中学校に入って支援学校を訪問した時、あの子と再会しました。成長していて昔の彼とは違っていたし、相手はきっと気づいていないでしょうが、絶対にあの子だと確信しました。もう一度会うことができ私は、とても嬉しかったです。

その時思いたった事がありました。障がいをもっているでもそれを補ってくれる人が側にいて助けてくれば、みんなと一緒に過ごせるということです。例えば、幼稚園で折り紙を折っている時、彼一人では上手に折れていなくても「先生」がサポートすることで上手に折ることができていました。このようにその時の「先生」のような人が側にいれば、障がいをもっている人でも、みんなと一緒に過ごすことができるのではないかと考えたのです。そうはいつでも、障がい者1人につき先生1人がついてくださることは、おそらく不可能です。その時、私が役に立つと考えるのは「AI」です。

現時点でも人と会話のできるロボットは存在しています。みなさんも家電量販店などで見かけたことはないでしょうか。しかし私が目指しているのは、より人間に似たロボットです。一緒にいて、話して、遊んで、まるで本当の「お友達」のようなロボットなのです。

そして、私はこのようなロボットを作る事を将来の夢に決めました。行きたい高校も決まっていなかった私ですが、ロボットを作る勉強ができる専門学校に行きたいと思っています。たくさんの困難があるとわかっていますが、この夢に近づくための技術を身につけていきたいのです。

現在も進化し続けているAI。これは私たちのよりよい未来のための、1(ワン)ピースになると思います。障がいのあるなしだけでなく、全ての人間に苦手な事や欠点は絶対にあります。その足りないところをAIと人間が補い合い、今よりもくらしやすい未来が必ずくると、私は信じます。



きっと、今タイトルを「ワガママ」と紹介していただけたと思います。ここで急ですが、私の紹介もさせてください。私は今、生徒会長を務め、こうして学校代表としてもこの場に立っています。成績も悪くないほうだと思います。好きなダンスを習い、周りにはいつも優しい友達があります。でも、もっといろいろなことを知りたい。見てみたい。そんな私は、欲張りでワガママでしょうか。謙虚さが足りないのでしょうか。では、例えば「どうする？」と聞かれて「何でもいいよ。」と答えたことはありませんか。「テスト勉強した？」、「全然してないよー。」なんて会話、よく聞きますよね。それらは、謙虚のつもりで言ったのでしょうか。ただ「自分の気持ちを伝えること」ができなかっただけではありませんか？

実は私は、係決めなどでやりたいものをすぐ譲ったり、話し合いで意見を言わずに終わったりすることがよくあります。生徒会長への立候補も自信がなく諦めようとし、この意見発表の学級代表すら、挑戦をやめようとしていたのを止められ、今の私がいます。児童会長を薦められたのに断った、引っ越してくる前の、あの遠い小学校にいたころの消極的な自分から何も成長していないのです。最初、いろいろと自慢げに話していましたが、本当は心臓がバクバクでした。偉そうなことを言ってますみません。

でもこれは、私に限ったことではないと思います。世界では、人生の成功の秘訣は対応力、成果は自分の力と考えるのに対し、日本人は、幸運と人のおかげと思うそうです。これは、日本に昔からある「謙虚さ」が関係しているのでしょうか。確かに、日本の誇るべき民族性であり、良好な人間関係を育むために大切な力です。しかし、私たち中学生は、周りを気にするあまり「みんなも発言していないからやめておこう」と遠慮してしまいます。大人はどうでしょうか。会議で積極的に意見を出し、高め合っているイメージがあります。ですが実際は、上司からの指示や人間関係など、中学生とは比べ物にならない遠慮をしているのか

もしれません。私が、私たちが日頃からしている言動は、本当に「謙虚さ」なのでしょうか。もう一度言います。ただ「自分の気持ちを伝えること」が、できていないだけではありませんか？

ただの譲る、我慢は「本当の謙虚」ではありません。「本当の謙虚」とは、自分の中に、自分をもっている人にしかできないことだと思います。もし、自分の考えが周りと違っていても「考えが広がった」と前向きに捉え、譲ったり我慢したりできる。それは、ネガティブな遠慮ではなく、互いを高めるためのポジティブな謙虚なのです。だから、私たち学生はまず、「自分の意見を言うこと」、つまり「自分をもつこと」が必要なのです。そうして、自分の意志をもって大人へと成長していく中で、ただの譲る、我慢ではなく「本当の謙虚さ」を身につけることができるのではないのでしょうか。

みなさんは今、自己主張できていますか。もし、自信がなく間違った謙虚さばかりならば、それは、あなたの中に自分がいないのかもしれない。ならば、ここで立ち止まっていたはいけません。日頃あまり話さない人に挨拶を試みる。苦手な食べ物を食べてみる。そんな些細なことでも、新たな自分と出会うための一歩になります。そして、昨日とは少し違う自分と出会い、それを繰り返すいつか、自信をもてる自分と出会わなければなりません。

私は、周りの目を気にしたり、人に流されてしまったりします。でも、自信をもって自己主張ができ、謙虚さをもっている。そんな素敵な大人になりたいです。だからまずは、いろいろな人と話して、価値観を広げていきたい。そのために、いろいろな場所に立ちたい。それは、挑戦したことのない立場や行ったことのない場所。そこには、昨日とは少し違う、新しい自分がある。周りの人を我慢させる「ワガママ」ではなく、自分らしく「わがまま」に人生を生きていきたい。この場に立てることも、その人生へと続く一歩。こうして今日私は、新しい自分と出会っています。



僕は小学5年生の頃、狩猟に興味を持ち始めました。自分の家が酪農家なので鳥獣駆除に来ていた猟師にあったのがきっかけです。

その頃から狩猟について調べていくうちに、野生動物による被害にも目を向けるようになりました。熊が市街地に降りてくるなどの人身被害や農作物の被害が増えてきた原因はなんだろう、共存するためにはどうしたらいいのだろうと考えたのがきっかけです。

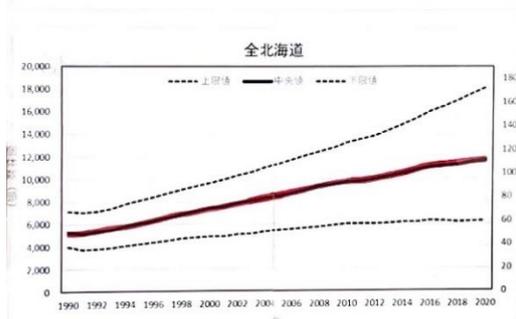
こちらは、北海道のホームページに掲載されている「野生鳥獣被害調査結果」のグラフです。



野生動物による、被害金額をまとめたものです。ホームページによると、平成24年頃から鳥獣対策を強化したため減少してきてはいますが、様々な要因で現在は増加傾向にあるようです。

最近では熊や鹿が市街地に出てくるというニュースをよく目にします。こちらは、北海道大学のホームページに掲載されている「ヒグマの個体数の推移」のグラフです。

ヒグマの個体数の推移



ご覧の通り推測値ですが増加傾向にあるのがわかります。

これは増えすぎて手に負えなくなって、人間と動物の境界線が無くなってきているのではないかと考えました。そして今後のためにも野生動物の駆除が必要だと思いました。

家畜や農作物は毎年たくさんの被害が出ており、実際に僕の家でも野生動物に家畜の餌を荒らされるなどと被害が出て駆除をしています。最近では、学校の1~2キロの範囲に熊が出て、登下校の際に保護者に送迎をしてもらうなど対策を迫られたことも数回ありました。

このような野生動物が身近にいる暮らしの中で、僕はどうしたら彼らと共に生きていくことができるのかよく考えさせられます。そしてそれは、お互い生きていく上できれいな事だけでは済まされないこともあるのです。

狩猟をしている動画やニュースがSNSなどに流れると、「動物を殺すなんて可哀想」などの意見をよく聞きます。野生動物の駆除が必要だと言うと、「なぜそんな軽々しく動物を殺すなんてことが言えるんだ」とみなさんは思うことでしょうか。ですが捕まえるだけではだんだん増えるだけで根本的にはなにも解決できません。

もちろん野生動物と共存していくために、私たちができる他の行動も考えなくてはなりません。里山や市街地に近い山林の管理ができていないことで人間と動物の境界線があいまいなため、野生動物が誤って市街地に降りて来ることが多くなってきています。まずここからは人間が住んでいる所、と分からせることが大切だと思います。間伐をしたり、森林の管理をしたりすることで見晴らしが良くなり熊などに「ここから先は人間の住処」と理解させることができます。また私たちは必要以上の伐採を行わず、野生動物の住む場所を保障することで、餌が足りず山から降りてくるという心配がなくなります。

僕たちは動物の死と直接対面していないだけで、多くの犠牲の上に命を繋いでいます。食肉はもちろんですが、暮らしの中で使う薬なども、動物実

験で作られているものも多いです。酪農家である僕の家でも、生産動物として生きた牛は、役目を終えると廃牛として屠殺され、肉になります。目に見えない犠牲はたくさんあるのです。

人は生きて以上たくさんの動物の命を奪ってしまうのです。だからこそ頂いた命に感謝をして美味しく食べてあげることが大事だと思います。また、一人一人が責任を持って野生動物をこさせない、食べたあとの処理をきちんとする、山に入った後、ゴミなどの人工物を置いていかないなど小さなことも被害の削減につながると思います。

そうすることで不用意に殺す必要がなくなり、市街地に出てきてしまうことも減るので、野生動物も安心して暮らせると思います。

共存するためには人が住み方や野生動物との付き合い方を考えることが大事だと思います。動物は人の言葉が通じません。

また人は動物の言葉が通じません。動物も人の思い通りに動いてくれません。だからこそ人が積極的に今後の向き合い方を考えていくべきだと思います。



僕は、ケガは自分を見直す貴重な時間でもあり、良い機会だと思いました。というのも、僕は5、6年間陸上競技をしてきて、一度もこんなに悩まされることは無かったからです。

短距離を専門にやっている僕は、中学2年生の頃、タイムが順調に伸びてきて、初の全道3位になりました。そのとき僕は、正直、調子に乗っていました。冬の大事な強化シーズンに入る頃、両足のシンスプリントというケガをし、それに一時期悩まされました。でも、僕は今まで数回なっているから大丈夫だと思い、ストレッチも補強トレーニングもしませんでした。

なぜストレッチや補強トレーニングをしなかったのか、原因は一つ。調子に乗っていて、自分の力を過信していたからです。周りの人の言うことなんて聞こうとしませんでした。そのため、長い間シンスプリントに悩まされました。

ようやく痛みが治まった頃、変なかばい方をしたのか、今度は足の甲が痛くなってきました。シンスプとは全然違う痛みで、ひどいときは本当に歩くのもキツかったです。本当ならば、痛みが出たくらいから休んでしっかり回復するまで待てば良かったのです。でも、僕はそれでも走るという選択をしました。なぜなら、僕は2年の頃と違ってライバルが増え、記録会で抜かされてしまうことが多くなったからです。

そのぐらいから、僕は何度も何度も足の甲の炎症の治療をさせてもらったし、自分でもケアやストレッチをするようになりました。

その後の記録会も自分なりに努力してきたつもりですが、現実には厳しく、タイムには全然出てくれません。何度も大会終わりには反省点を出して、時には一人で涙を流すこともありました。そ

れでも、僕は全道大会までに完全復帰することを目標に、毎日家で眠たくてもゲームをしたくても、でも、負けっぱなしの自分が嫌なので、30分から一時間くらい体幹トレーニングや股関節の可動性をつけるストレッチなどを毎日やりました。不安や焦りもありましたが、それらの気持ち乗り越えて、全道大会ではよい結果を残せるようにやり続けました。いつの間にか、これまでの自分なら絶対に面倒くさくてやらなかったことが自然とできるようになってきました。

そして、最後の夏の全道大会の日が来ました。正直、自分では成長したのかもわからないし、足の甲は痛い。それでも、今まで積み重ねたことがタイムに出ることを信じて走りました。100メートルはあと一人のところでタイムで救われず、準決勝に残ることができませんでした。初めて全道大会で決勝に残ることができませんでした。一方、200メートルは2年生の時の記録を破り、自己ベストを出すことができました。そのとき、僕は正直、うれしかったです。ケアやストレッチをしてこなかった時の自分のタイムより、毎日努力してきたほうがタイムが良かったからです。少しは努力が報われたのかなと思いました。

今振り返って思うことは、ケガは自分にとってチャンスだったということです。このように僕は、ケガというチャンスをものにすることで、これまでの自分が絶対にしないことを、自然とできるようになりました。そして、新しい自分を見つけることができました。

ぜひ、みなさんも、不運やアクシデントをネガティブにとらえず、その出来事が何かを変えるチャンスだと思ってみてはどうでしょうか。



言葉は人の心を動かします。

あなたにとって「言葉」はどのようなものですか。「言葉」を人からもらうことは自分自身にどんな影響を与えますか。

「葵、中学生になって少し変わったよね。なんかいいことあった？」

会話の中で友達が口にした言葉が、その夜、ふと頭に浮かびました。友達にとっては何気ない一言が、私は少し気になりました。

気付かないうちに自分を変えた原因を考えましたが、分からなくなるばかりでした。それでも、自分の行動のきっかけとなっているものは人からの言葉だと思いました。

人からの言葉で、挑戦や行動につながった経験があります。私は、人前に出ること、話し合いを進めることが苦手です。ですが、そんな自分に、大きな挑戦の機会がおとずれました。

私の通う大空学園は、小中一貫校で、小学5年生から中学3年生で生徒会を運営しています。私は図書委員になったのですが、なんと、委員長を私達7年生から選ぶことになったのです。先輩方がいる中で全体をまとめるなんて、想像もできませんでした。

迷っていた私に、母がこう言ってくれました。「やらないよりも挑戦してみたほうが、後の自分にとってすごくいい経験になるよ。」

この言葉で、勇気を出して変わってみよう、と心が動きました。人からの言葉は、時に人の行動を変える原動力となります。人を応援すること、励ますことは、相手を勇気づけて相手の背中を押すことができます。

しかし、その一方で、人からの言葉で傷ついたこともあります。思ったことを相手の立場を考えずにそのまま口にすると、伝わり方が変わってきます。

私の場合は、相手にそんなつもりがなくても、悪口を言われたと感じて落ち込んでしまったことがあります。

その次の日は、その子と話していても、悪口を言われたことばかりが気になって、話がほとんど耳に入ってきてませんでした。その時の私の様子を不自然に感じて、「なんかあった？」と聞いてくれました。

私は勇気を出して自分の思いを伝えると、誤解を解くことができました。

その経験から分かったのは、言葉は複雑なもので、言い方や受け取り方によっては傷ついてしまうことがあるということです。誤解を招いたり、相手を傷つけたりしないために、私は、言葉を口にする前に一度考えて言葉を選ぶことが大切だと思います。ですが、何より大切なのは、伝わっているかを振り返ることよりも、相手を思って自分なりの解決方法を考えることだと私はこの経験から気づくことができました。

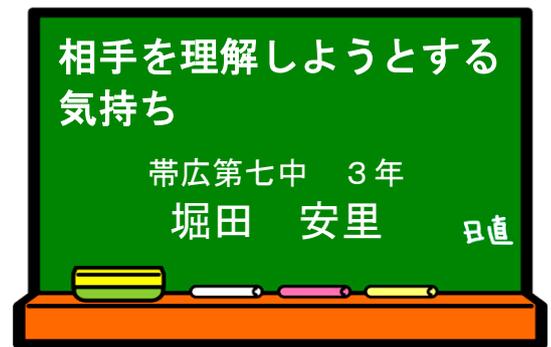
以前の私は、自分から行動することがなかなかできませんでした。そんな中、人からの言葉が行動に繋がり、こうして自信を持って自分の意見を述べるできるようになりました。そして今では、これらの経験一つ一つが自分自身の成長に思えてきます。

人からの言葉は人の心を動かす力があります。人を励まし、支えるような言葉ばかりではなく、悪口などの人を傷つけてしまうもの、誤解から生まれる、人を悩ませるもの。

そんな様々な言葉の中で、迷っている人が一歩踏み出せるような言葉を探すことは難しいことです。ですが、自分が相手のことを心から応援し、真剣に考えた言葉は必ず相手の心を動かす言葉となるはずです。

私自身が、言葉によって挑戦できたように、今度は私が人の背中を押すことのできるような言葉を使っていきたいです。

言葉は人の心を動かします。



私の姉は脳性麻痺と知的障害がある。体を器用に動かすことができず、急に怒り出して人に怪我をさせることもある。

そんな姉を私はよく思わないことが度々あった。なぜ両親は姉を叩いたりしないのだろうと考えたこともあるし、自分が我慢を強いられたと感じて、すごく恨めしく思う時もあった。けれども姉のことを悪く思うとモヤモヤした気持ちになるのが嫌で、私は姉の障害を理解しようとして意識するようになった。すると少しずつ姉のよいところを見つけられるようになり、さらに姉を大切な存在だと「はっきり」受け止めることができた。それからは人の良いところを探したり、自分と異なる考え方も素直に受け入れようとして意識するようになった。

相手を理解しようとする気持ちがあれば、今まで自分になかった考えや価値観も受け入れることができる。これは人と交流する上でとても大切なことだと思う。

なぜなら新たな視点加わることで、物事を多角的に見られるようになるからだ。私たちは日々、様々な考えや価値観を持つ人と交流している。その時、相手を理解しようとして意識すれば、新たな発見を得ることができるのではないかと私は姉の障害を理解しようとして意識したことで、姉の大切さやよいところを見つけることができた。

それだけではない。人とのトラブルを避けるためにも、相手を理解しようとすることは重要だ。例えば口喧嘩になりそうな時は、自分の事情と相手の事情の両方を考えなければいけない。私なら自分の言動を振り返って悪かったところを謝り、相手のやりすぎたところも伝える。そもそも、自分に対して相手も困っているからぶつかるのではないだろうか。これらのことから、相手を理解しようとする気持ちは、人と交流する上でとても大切だと思う。

しかし、自分と違う考えや価値観を持つ人と交

流するたびに相手を理解しようとするのは、けっこう面倒だ。ふだん仲良くしている人や自分と似たような考え・価値観を持つ人との交流だけでも十分新しい発見がある、と感じる人もいるだろう。だが、自分と異なる価値観や好みではない考え方を学ぶことで、自分自身についてより深く考えることができるようになると思う。また、理解が面倒くさいということに対して、私は相手の全てをわかろうとしなくていいと思う。私が姉の障害を理解しようとしても、どうしてもわからないことがたくさんあった。それでも、受け止めることができたいくつかで、私の視野はとてつもなく広がったと感じている。相手を理解しようとする気持ちを持てば、人としてさらに成長できると思う。

とはいえ、人とトラブルが起きた時、よく思っていない相手の事情を理解するのはとても難しく、疲労感でいっぱいになるかもしれない。だが、それではいつまでもトラブルもモヤモヤした気持ちも解決しない。解決させるには、自分の都合で考えるのではなく、少しでも相手の立場にたって考える冷静さが大切だと思う。

このように、相手を理解しようとする気持ちを持つことは、物事を多角的に見られるようになって自分自身の成長につながったり、トラブルに惑わされず穏やかに過ごす秘訣なのではないかと私は考えた。そして、一人一人は違うことと、それによって自分も育ててもらっていることに気づき、相手の思いを尊重することが大切だ。それを私は、周囲に負担ばかりかけていると思っていた姉から教わった。

現在中学生の私は、世界のいろいろな文化について調べたり、友達と好きな食べ物やニュースについて議論したりすることに興味がある。相手を理解しようとする気持ちを忘れずに、様々な考えや価値観に触れ、視野の広い人間になりたい。



当たり前の価値観

緑園中 3年

岡本 ルミナ 日直

秋になると思い出す。幼稚園の運動会。私は同級生のお世話係をしていた。集合場所まで彼女の手を引いて連れて行ったり、一緒にお遊戯を踊ったり。中でもリレーは忘れられない。アンカーだった私は、逆走してしまった彼女からバトンを受け取り、たったひとりで園庭をかけた。なぜか、走っている間に涙がこぼれそうになった。今の私ならわかる。困っている人がいたら助けるのが当たり前。でも当時の私は、この状況を理解できていなかった。年下の子の面倒を見るというなら話はわかる。でも、同じ年の子のお世話をなぜしなければならなかったのだろう。母に相談すると、お世話係になった理由を即座に理解できたという。なぜなら母も、六歳上の姉も、幼い頃、私と同じ状況下に置かれていたからだ。母と姉と私に共通する部分は何なのか考えてみた。すると、案外答えは簡単で、幼い頃から私達は三人共身長が高かったことが判明。それだけで周囲からはいつも大人扱いされてきたのだ。幼稚園時代、背の高い私が彼女のお世話をするのは先生たちにとって、「当たり前」だったのかもしれない。

「当たり前」。辞書によると、「自然で少しも不思議でないこと」らしい。考えてみると、私はこの時から、周囲の「当たり前」という価値観に支配されていたのかもしれない。

小学生になると、スピードスケートの授業があった。授業の前に、先生から靴の紐を結ぶように指示された。周りの子は、お母さんに結んでもらっていた靴紐を、私は自分で結んだ。スケートを習っていたため、周りの大人からは「当たり前」に「自分でできる」と思われていたのだと思う。

中学校に入った私は、ソフトテニス部に所属していた。2年生になり、私達がメインになると、顧問の先生は、練習や試合などでよく私達に「いつも通り、当たり前ね。」と声をかけてくれた。私は考えた。そもそも「当たり前って何だろう?」「当たり前なんてことあるのだろうか?」。これまで

で私が言われてきた「当たり前」は、決して「当たり前」なんかじゃなかった。スケートの紐縛りははじめからできていたのではなく、何度も練習したためできたこと。努力したからできていただけなのだ。逆に、テニスの試合では、緊張とプレッシャーから、普段「当たり前」にできていたプレーが突然できなくなるという経験も何度も味わってきた。今こうして、多くの人の前で話しているが、本来、私は文章を書くことも、人前で話すことも得意ではない。毎年意見文を書くことだって、苦労し、悩み、何度も何度も書き直して完成させている。こうして人前で話すことは、いつも「挑戦」のつもりで臨んでいる。決して「当たり前」にできるわけではない。

これまで、私の見た目やキャラクターで「当たり前」にできると思われ、悩んだこともたくさんあった。ハードルはどんどん上がり、いつだって「期待に応えたい」と思って努力してきた。私を認め、期待してくれることは嬉しいが、もっと頑張っている姿にも目を向けてほしいと思う。言葉や態度で表には出さないけれど、努力してきたからこそ今の私がいる。

幼稚園の時、同級生のお世話をした経験も、一人でスケートのひもを縛った経験も、部活動でうまくいかなかった経験も、今思えば、全てが私の成長につながっていると思う。しかし、「当たり前」というのは、世間一般の常識のように使われることが多いが、私は、「個人」の価値観でしかなく、誰にでも当てはまるものではないと思っている。私達が普段「当たり前」だと思っている日常だって、年齢や性別、考え方や行動が違えばみんな違う。どこを「当たり前」と捉えるかで価値観の違いが生じるのだと思う。私はこれから、周りからの「当たり前」にとらわれることなく、自分の考えを大切にしていって進んでいきたい。百の言葉よりも一つの行動で示そう。自分で思った「当たり前」を信じて。



「私はこれはできないのに、あの子はできている。」と思ったことや、兄弟や姉妹の間で「お姉ちゃんはできているのに、なぜ妹はできないんだろう。」と、比べられた経験はないだろうか。

私にはこのような経験がある。それはバスケットボール部での出来事だ。私が二年生になってすぐのことだった。私は後輩と一对一の練習をすることになった。私はディフェンス、相手はオフェンスだ。速いスピードのドリブルで私を抜きに来た。するとどうだ、あっという間に横をすり抜けていき、私は負けてしまった。その後輩は、私には無いバスケットの才能があるのだと思った。

これだけが原因ではないと思うが、私は全十勝夏季大会の準決勝の試合で、その後輩よりも後に出場することになった。後輩よりも後に出場する。それは、私の実力が認められていないのと同じだと思ってしまった。つまり、私はその後輩に完全に負けてしまったのだ。自分の存在が認められなかった気がして、その時は冷静ではいらなかった。試合の後の車の中で、悔しくて泣いてしまった。

その後も、私にも聞こえる大きい声で「後輩に負けるとかありえない」と言われたことがあった。その時も、とても悔しかったし、悲しくて泣いてしまった。その通りだったから、言い返すこともできなかった。後輩に負ける。普通ではありえないだろう。それなのに私は負けてしまったのだ。その後しばらくは悔しい気持ちをひきずっていた。

今振り返ってみれば、後から出場したことを才能の差のせいにして、言い訳に使っていたのだ。自分の努力が足りなかつただけなのに、「自分より後輩が上手いからしょうがない」と、本当の問題から目をそらしていたことに、そこでやっとなづいた。

そこから私は変わろうと努力し始めた。例えば、家に帰ってから一人でその日の部活の反省をした

り、他には、家でのトレーニングや、ディフェンス練習をした。泣きそうになったり、怒りそうになったりしたときは、一旦心の中にしまって落ち着くようにした。もし、後輩に負けた経験がなかったら、変わろうと思うこともなかっただろう。また、他にもきちんと当番活動や、担当の仕事をしっかりやるようになったというのも私の中の大きな変化だ。

そんな時、「努力は無限」という中村清さんの言葉を知った。努力には限界がなく、したいならどれだけ努力してもよいし、努力する権利は誰にでも平等にある、という意味だと私はとらえている。才能に頼ってはいつか限界が来る。ならば、私は努力の面では誰にも負けると言えるまで頑張るしかない。

また、「チャンスの神様は前髪しかない」という言葉もある。チャンスの神様は正面から猛スピードでやって来て、迷っているうちに通り過ぎてしまい、通り過ぎてからは後ろ髪がないから捕まえられない、というギリシャ神話の一つだ。

私の部活に例えるとすれば、ボールのパスでの選択だ。目の前にスペースが開いていて人がいるのにも関わらず、一瞬迷ってパスを出さず、得点のチャンスをのがしてしまうことが何度もあった。

こうやって選択を間違えたり、時間をかけすぎてチャンスをのがしたりするのは、きっと練習や努力で克服していけるはずだ。

才能は有限かもしれないが、努力は誰にだって無限にできる。努力で大きな壁を乗り越えていけると思うし、才能が「ある」か「ない」かで、自分の限界を決めつけたくない。

才能があってもなくても、私はバスケットが大好きだ。好きだからこそしっかりと努力し、これからチームの勝利に貢献していきたい。



私は中学3年生の1学期を過ごして感じたことがあります。それはとにかく「忙しかった」ということです。3年生に進級してすぐに修学旅行の準備がありました。ゴールデンウィークという小休憩を挟んで、修学旅行へ行きました。思い出深かった修学旅行を振り返るまもなく1週間後には体育祭の特別時間割の開始。学級では、体育祭に向けた係やクラスのスローガンづくりもありました。体育祭が終わって落ち着くかと思いきや、カレンダーを見ると前期中間テストまで残り2週間。そこから必死に勉強に励むことになりました。それと並行して部活動に入っている人は、最後の中体連、大会に向けての練習があったと思います。

改めて振り返ると、1学期ってこんなに「忙しかった」んだな、ということがわかります。忙しい日々を過ごしていると自分のやりたいことなんてほとんどできません。でも私は「忙しい」ことは「楽しい」ことだと思います。

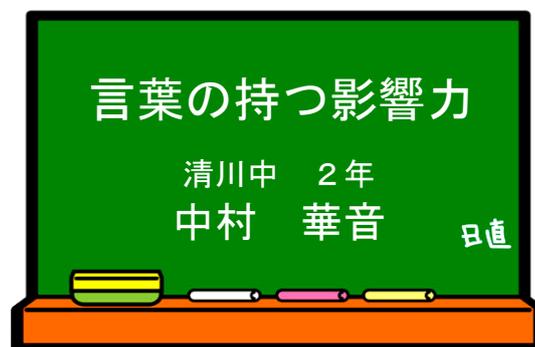
私はこの夏、少年団と塾で追われる日々を過ごしていました。塾には、入試対策や学力テスト対策でほぼ毎日行きました。そのたびに宿題が出されるので、帰ってきてからそれもやらなくてははいけませんでした。また、私は中学1年生から弓道の少年団に入っているのですが、少年団のほうでも、全国大会優勝に向けて、週3回程度の通常練習に加え、毎日2時間程度の特別練習を行っていました。このような毎日を過ごしていたので、夏休みは塾と少年団の活動で1日が終わってしまうことも多くありました。この忙しい日々の中で、学校で出された課題や夏休み明けに行われるテストに向けての勉強もしなくてははいけませんでした。それでも私は、この忙しかった夏休みを振り返ると、とても楽しかったと感じます。それは目標に向かって一生懸命にやったからだと思います。毎日暑い中、長時間練習するのは辛かったですが、この練習のおかげで、全国大会で3位という結果を残すことができました。このように、忙しい日々

を過ごしていましたが、その中で、自分の成長を感じられた特別な経験を得ることができたのです。

また、私は今まで何においても「いかに楽に過ごすか」という視点で生活していました。例えば係決めや学級代表決めでも「誰かが代わりにやってくれるだろう」と思って見ていることが多かったです。でも自分が思い切って常任委員に挑戦した結果、「忙しい」ということは誰かの役に立つことだと知りました。実際に朝早くに学校に登校し、みんなの家庭学習を集めたり、月に1回の委員会で話し合ったりと大変なことが多かったのですが、自分の呼びかけで悪かったところが改善されるなど嬉しいことが多くありました。

それに、「忙しくて楽しい」という考え方は、社会に出てからも通じると思います。将来、自分が仕事をするようになったときに、楽に過ごそうとしながら仕事をする大人と、忙しいことを楽しみながら仕事をする大人、どちらのほうが充実していると思いますか？ 私は「忙しいことを楽しみながら仕事をする大人」のほうが充実した生活ができると思います。そもそも楽に過ごそうとしている人に、いい仕事や自分のやりたい仕事があるとは思えません。やはり忙しいことを楽しんで一生懸命に働いている人のほうが、面倒くさそうに働いている人より周りからの信頼も高くなり、いい仕事や自分のやりたい仕事をする事ができると思います。

中学3年生として過ごすのも、残り4か月。これから、定期テストや学力テスト、そして高校入試があります。それから卒業式の準備。最後の思い出作りもしたいです。中学3年生って本当に忙しい。「忙しい」というのは大変で、逃げたくなるようなことだと思います。しかしこれを乗り越えた先には達成感とともに楽しかったという思いが生まれるはずですよ。ですからみなさんも忙しさの向こう側にある楽しさを見つけてみてください。



みなさんは言葉の持つ影響力について考えたことはありますか？

生き物にとって良い影響も悪い影響も与えることのできる言葉ですが、良い面と悪い面を持ち合わせています。そんな言葉の持つ影響力について考えてみました。

もしあなたが友達や家族、知人にひどいこと、もしくは悪口を言われたらどんな感情を持ちますか。逆に良い言葉を言われたとき、どのような感情を持つでしょうか？

その感情は人それぞれでしょう。私が楽しいと感じる時、楽しくないと感じている人もいます。でもそれは一人一人の価値観です。私はその一人一人の感じ方、価値観を大切にしていきたいと考えています。

例えば、自分の頑張ってきた夢が叶わないとなった時、諦めないでと言う人や、よく頑張ったねと言う人、頑張りが足りないと言う人がいると思います。それを言葉として言われた時、それぞれ感じ方がありますよね。また、そんな言葉をかけられあなたはどのような返し方をしますか。返し方も人それぞれです。返し方によってその人の人柄や個性が言葉として出てきます。

多くの言葉があり、表現の仕方がさまざまある中で、どんな返し方を選択するのか、その中で一人一人の言葉の美しさというものがあふれ出ると思います。それが言葉の良い面だと私は考えています。

では言葉の悪い面はどんな所でしょうか。それは、言葉の使い方を一度間違えてしまうと、元に

戻せないことです。言葉は誰でも口に出し相手に伝えることができますが、自分に悪気はなくても人を傷つけているかもしれません。だからこそ、言葉は不用意に口に出さず、相手とのコミュニケーションをとることを大切にしてほしいと思います。

私がよくインターネット上で見かけるのが、アプリでのコメント欄の書き込みです。アプリでの利用者が多いと先ほどもお話ししたように、いろいろな人がいて、同じ動画を見た時にも視聴者側の感じ方もそれぞれだと思います。私はインターネットをよく利用していて、一日にたくさんの動画を見ています。その中で、一番目に入るのが、良くない批判的なコメントです。もちろん書き込むのは自由ですが、その良くないコメントによって追いつめられたり、傷ついたりする人がいることを忘れないでほしいと思います。

良い面では、誰かが落ち込んでいる時、あなたがかけた言葉によって気分がよくなったり、元気づけられたり、その人を救うことができるのです。

このように言葉の影響力はとても大きく、生き物にとって良い影響も悪い影響も与えることができるものです。

このようなことをふまえた上で、ぜひみなさんも言葉のもつ影響力について考えてほしいと思います。

審査員長講評

帯広市青少年育成者連絡協議会
会長 細岡 和幸

発表された14名の皆さん、お疲れさまでした。皆さんの発表は素晴らしかったと思います。

さて、今大会で何点か気がついた点をお伝えします。話すテーマの強弱の付け方、話の内容に関しては皆さん申し分ないですが、それをどう表現するかというところで点数の差が出たと思います。

気持ちの変わるきっかけとなったエピソード、どうして自分の気持ちが変わったのかについてももう少し説明をしてくれると、より話の内容に厚みが出たのではないかという意見が、審査員の中で多く出ていました。

また、起承転結の『結』できっちり結んで着地させなくてはいけないところが、少しぼやけてしまっていた点が見受けられたかなと思いました。

今回は、話の内容が『関わり』に集中していたように思います。人と人の関わり合い、人と動物との関わり合い、人と何かとの接し方に関して、皆さん一生懸命考えていただいたと思います。

人と人との間はもちろん、動物や自然界との間など、これからも『関わり』について考えていくことが、皆さんの成長につながっていくと思います。

最優秀賞に選ばれた浅野さん、おめでとうございます。浅野さんには14名の代表として来年行われる十勝地区大会がありますので、頑張ってくださいと思います。

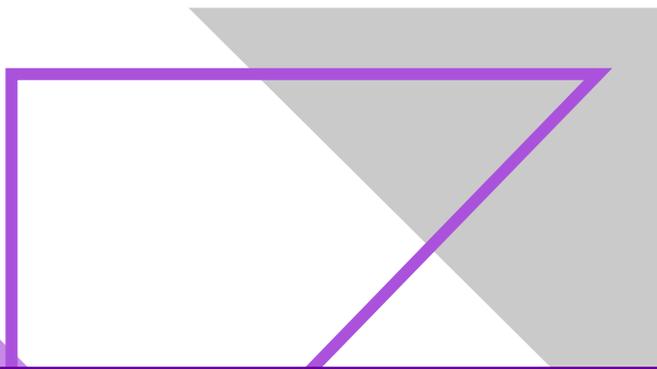
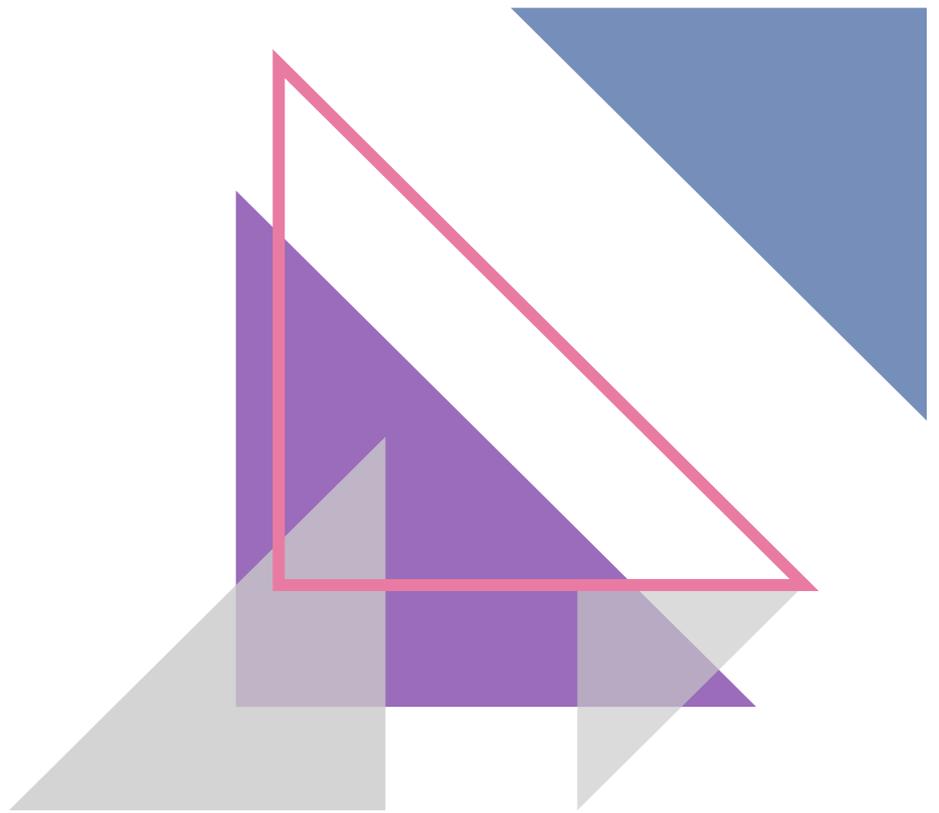
1年生2年生は、来年もまたこの中学生からのメッセージに挑戦してほしいと思います。3年生の方々は、高校に行って、また新しい自分を見つけて頑張ってくださいと思います。

皆さんありがとうございました。今後の皆さんの成長に期待しています。

審査員名簿

所 属	役 職	氏 名
帯広市青少年育成者連絡協議会	会 長	細 岡 和 幸
帯広大谷短期大学	非常勤講師	武 内 哲
帯広市P T A連合会	副 会 長	三 浦 真 希 子
北海道新聞帯広支社報道部	部 長	堂 本 晴 美
北海道退職校長会帯広会	会 長	那 須 野 由 章
帯広市教育研究会国語部会	部 長	高 橋 宏 幸
帯広市教育委員会学校教育指導室 学校教育指導課	指 導 主 事	松 本 好 史

(敬称略)



第36回 中学生からのメッセージ集録

発行日：令和6年3月11日

発行：帯広市教育委員会 学校教育部 教育総務室 学校地域連携課
帯広市西5条南7丁目1 市役所庁舎8階

電話：0155-65-4162 FAX：0155-23-0161

Eメール：school_cooperation@city.obihiro.hokkaido.jp